

「クラウドファーストからクラウドネイティブへ」

クラウドサービス活用のコツとポイント

J B C C 株式会社



クラウドサービス活用のコツとポイント

1. クラウドサービスの利用動向
2. 基幹業務インフラとしての利用形態
3. オンプレからクラウドへの移行のポイント



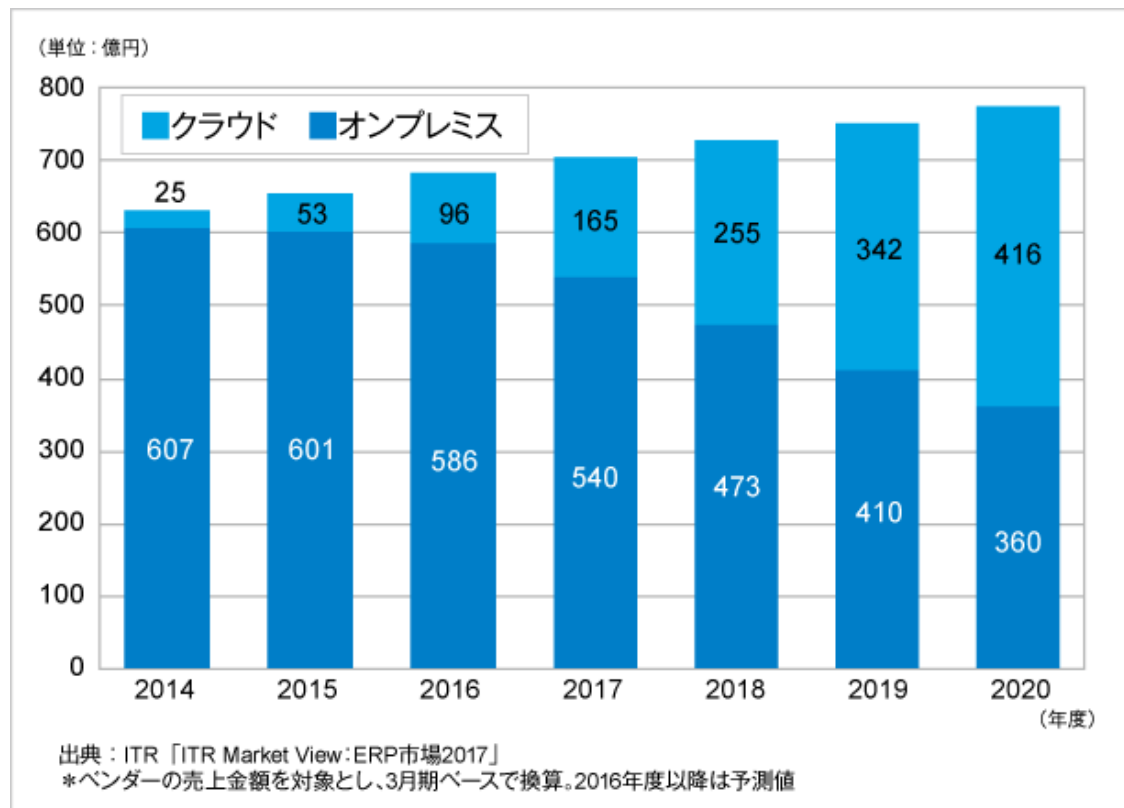
クラウドサービスの利用動向



クラウドサービス利用の動向

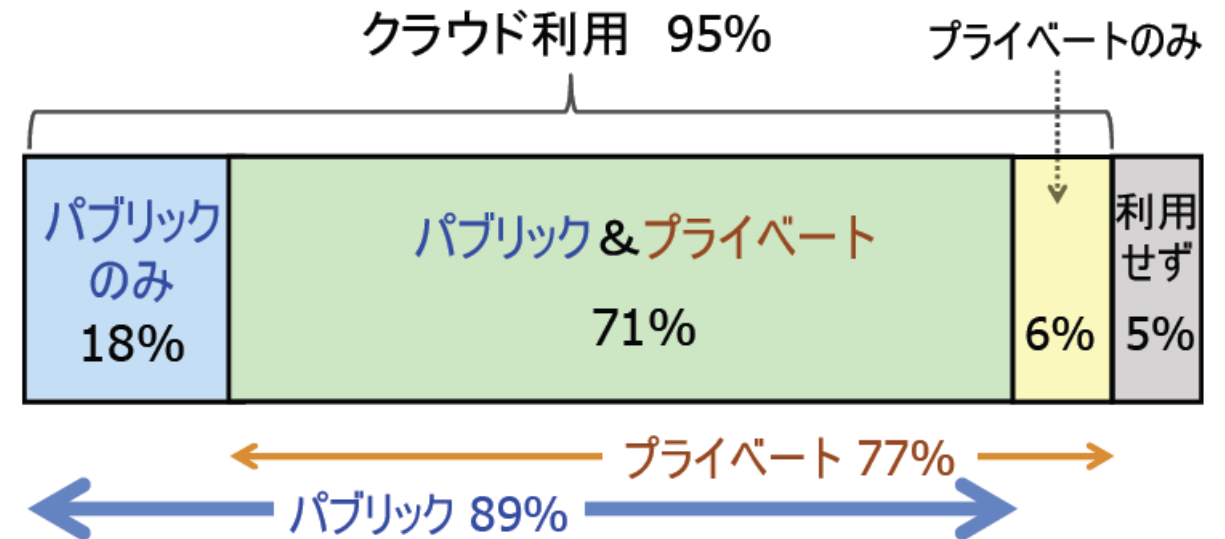
パッケージ製品はクラウド環境への導入が急拡大、
2020年度にはクラウドがオンプレミスを凌駕

運用形態別ERPパッケージ市場規模推移および予測



グローバルでは 95% が既にクラウドサービスを利用

2016 State of the Cloud Report

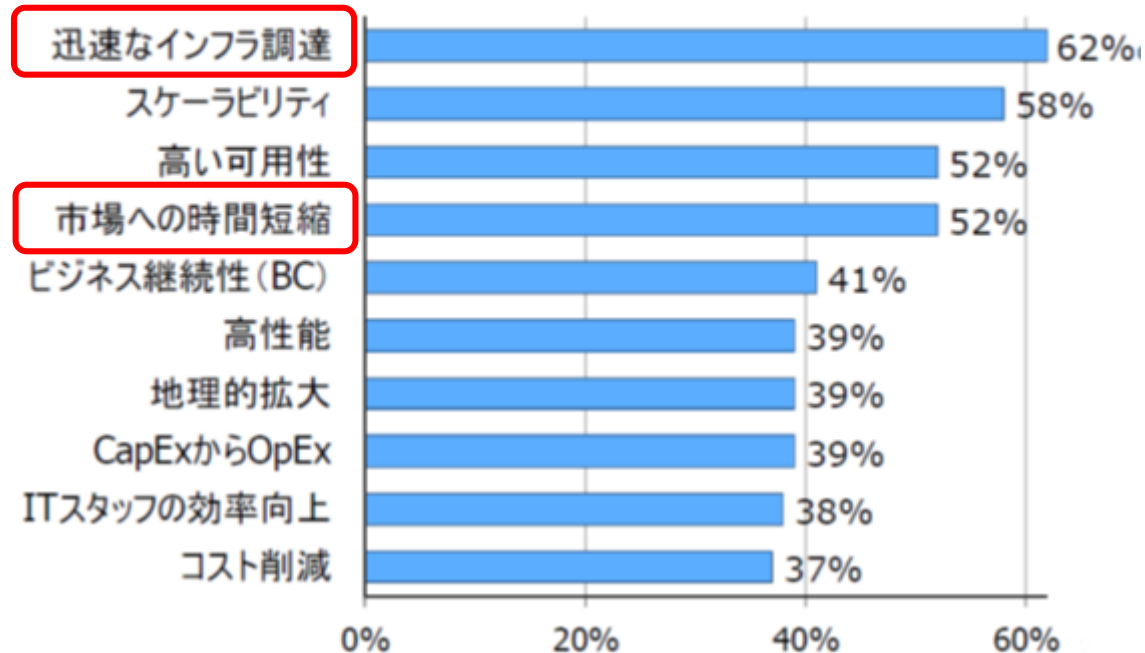


クラウドサービス利用の動向

クラウド利用の利点はスピード

2016 State of the Cloud Report

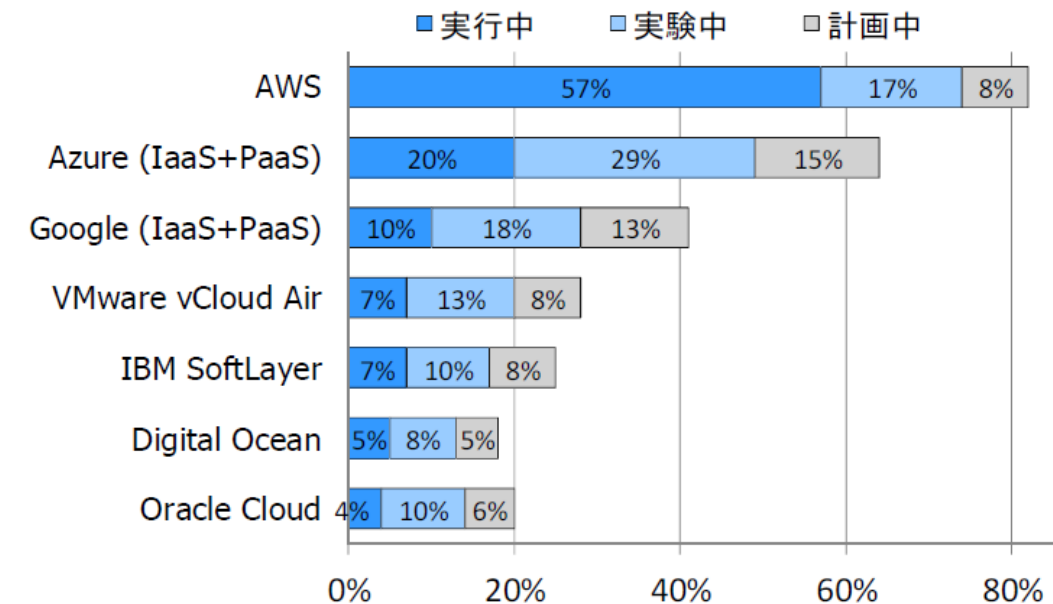
クラウドの利点



AmazonWebServicesがTOP

2016 State of the Cloud Report

全企業におけるパブリッククラウドの利用状況 (複数回答あり)

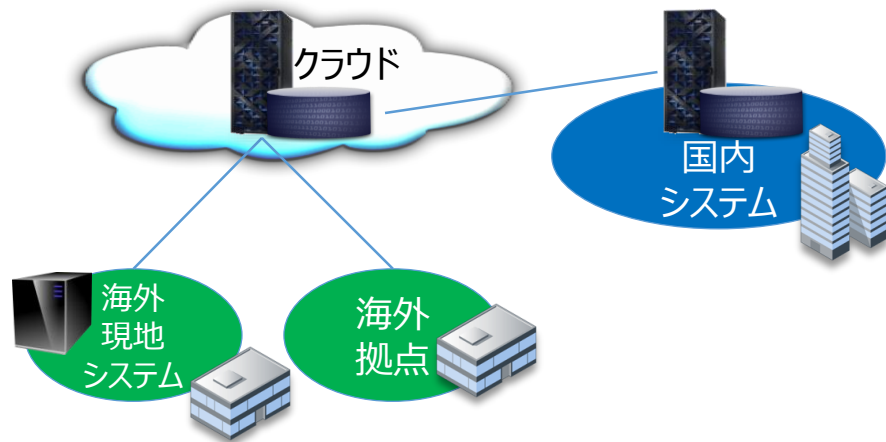


基幹業務インフラとしての利用形態



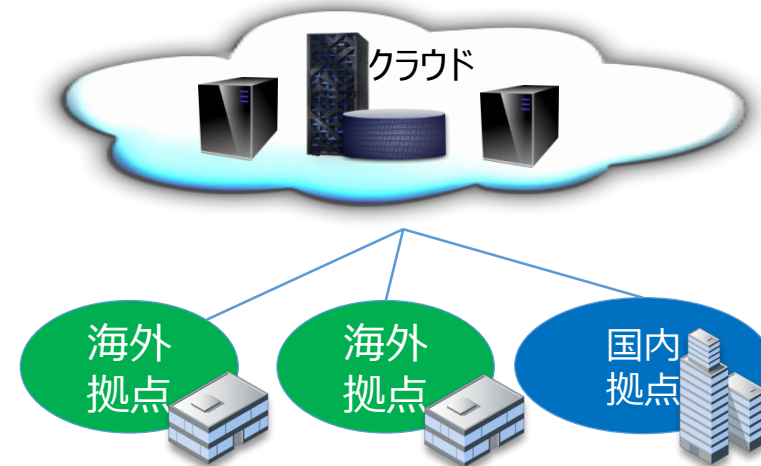
グローバル展開を中心にした利用形態

利用形態① 海外拠点向けシステムとしての活用



- 国内は固有で独自システムを確保
- 海外は共通システムを運用
- 海外現地システムとの橋渡し

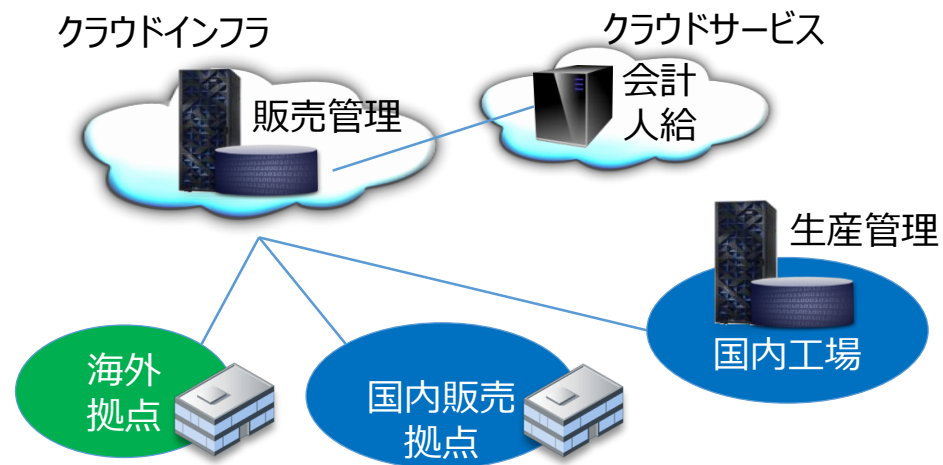
利用形態② 全社基幹システムとして活用



- グローバル全体の基幹システムインフラをクラウド化
- グローバル共通の全社システムの運用

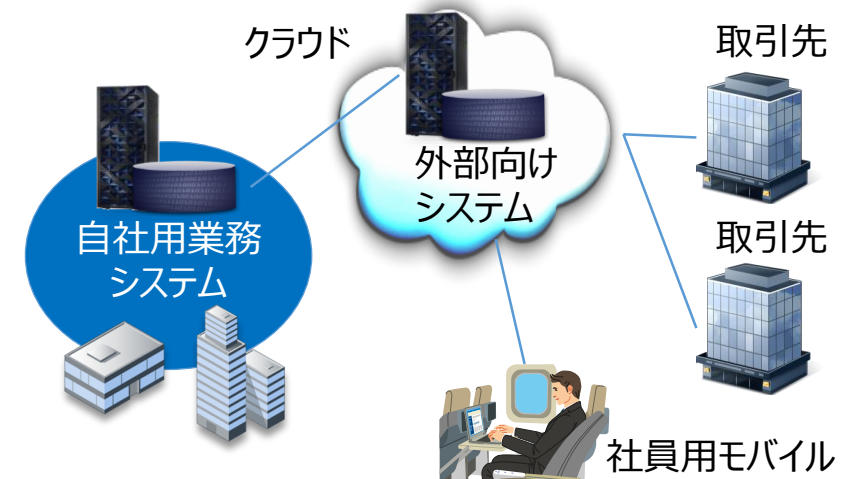
業務視点を中心にした利用形態

利用形態③ 業務別視点のクラウド活用



- 工場は固有で独自システムを確保
- 販売系は独自の共通システムを運用
- 会計／人給システムはクラウドサービス活用

利用形態④ 利用領域視点のクラウド活用

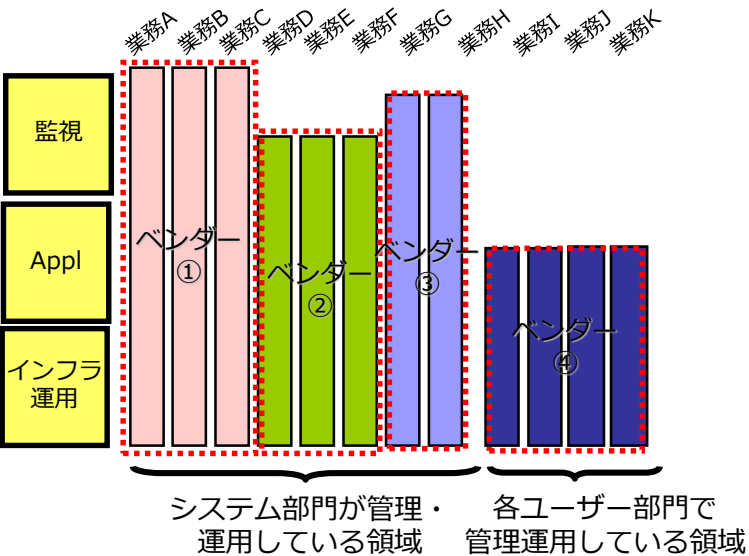


- 取引先との情報共有化
- 社員のモバイル化の促進

オンプレミスからクラウドへの移行のポイント

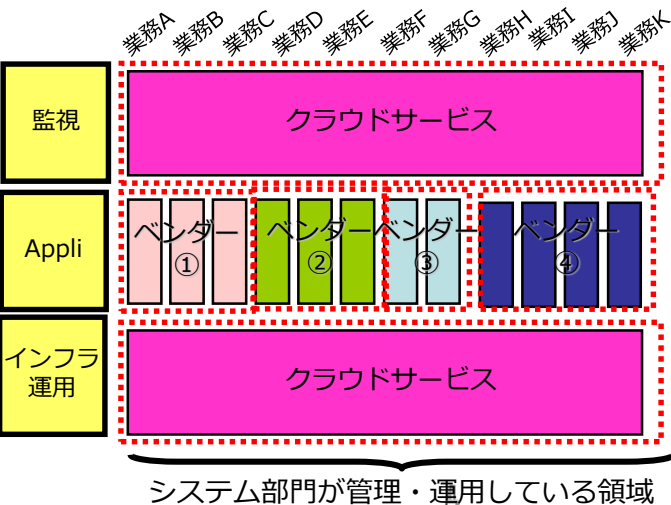
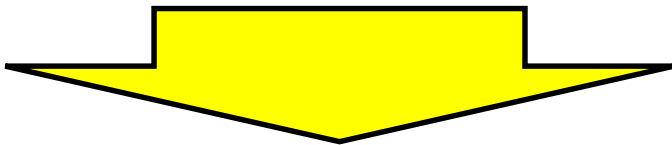


基幹システムインフラの課題と今後のあるべき姿



現行課題

- 運用レベルが、システムによってばらばら
- 運用やコストが大きな負担



あるべき姿

- 全社としての統合管理を図る
- コスト削減と運用負荷の手間を減少
- 本来の企業活動に専念

クラウド移行 プロジェクトの進め方

- 現行サーバーをクラウドへ移行検討する為には
要件確認、移行計画、人員体制、アプリベンダー連携、運用レベル策定など全ての観点において考慮が必要。
- 特にアプリケーション稼働しているサーバーに関しては、**クラウド上でのシステム検証が重要**
インフラ基盤上の影響度を確認することが必要。
- クラウド移行を円滑に進めるには、**システムの影響度合いの少ないシステム**から順次進める。



- ・お客様とクラウドサービスベンダー、アプリベンダーとの連携作業
- ・APPL修正部分での工数と費用を考慮

まずは使ってみて検証・確認する

クラウド移行の重要項目はオンプレ・クラウド間のデータ連携が鍵

1. 移行方針、移行対象、移行計画の検討

・アプリのクラウド対応、ライセンスのクラウド対応の確認

2. クラウド利用検証

・**まずは利用と検証の実施**

オンプレ既存APL

APL導入



クラウド環境での動作検証

3. 第1段階の移行

・**第1段階の移行、オンプレ/ハイブリット利用**

オンプレ
既存システム

データ連携

VPN

HULFT



クラウド移行システム



NXデータ連携HULFTを使って
オンプレ・クラウド間のデータ連携
を実現

4. クラウド対応の実施

・**オンプレシステムからクラウドサービスへの置換**

クラウドサービスを活用したシステムへの変換

5. 最終移行の実施

・**クラウド環境への移行**



VPN



クラウド移行システム

段階的移行やハイブリッド利用に有効な **NXデータ連携** Powered by HULFT

必要なタイミングで
 必要な期間だけ
 クラウドとオンプレをつなぐ
 HULFTのクラウドサービス



クラウドへの移行やクラウドサービス活用の検討をご支援

Q1 他業務との連携・他のシステムとのインターフェースの有無、SOAやXML、業界標準などの汎用的な連携方式はどうか？

- 1 独立した業務
- 2 標準規格に準拠した連携
- 3 独自インターフェース方式の複数の高度に複雑な連携

Q7 仮想環境や、マルチテナント対応など、共用しやすい仕組みになっているかどうか？

- 1 マルチテナント用で、標準化された環境向けに開発されている
- 2 マルチテナント用のアーキテクチャで設計されている
- 3 仮想化環境で稼動するように設計されている
- 4 わずかな変更でマルチテナント環境で稼動する
- 5 マルチテナント環境で稼動させるために、大きな設計変更が必要

Q2 業務コンポーネントの負荷傾向について負荷に季節や、時期による変動が多いかどうか？

- 1 一時的な処理
- 2 時期によって
- 3 処理量の変動
- 4 処理量の変動
- 5 長期に亘り、

答性を求めているか？

JBCCではお客様のシステムインフラの状況を確認し
クラウドへの移行の効果や影響をアセスします。

Q3 前提とするIT環境の標準化状況はどうか？

- 1 標準化された
- 2 標準化された
- 3 特殊なHWインフラかつ特殊なSWイメージを必要とする

- 1 データや情報を参加組織の間で共有することにより大きなビジネス上の価値を生み出す
- 2 データや情報の蓄積や共有は業務効率を大幅に向上する、あるいは、大きなビジネス機会を生む
- 3 データや情報の蓄積や共有の利点は少ない

Q4 業務コンポーネントのユーザーの広さ/多さ 汎用性の高い業務か、一部のユーザー、グループに特異な業務か？

- 1 全社に対して
- 2 共通サービス
- 3 各組織や業務
- 4 アプリケーション
- 5 小規模なユーザー

移行の効果が高いもの、オンプレに残すべきもの、
クラウドサービスに置き換えるものなど
現行システムのクラウド移行の方針を検討します。

限や、
継続性の価値がある
に扱うべきデータである
共有、

Q5 業務コンポーネントの処理の複雑さや、応答性の要求はどうか？

- 1 一般に使える
- 2 特定の業務や
- 3 ビジネス上の差
- 4 標準アプリケーション
- 5 ビジネス上の差別化をもたらす、高度なカスタマイズや、独特なアプリケーション処理がある

Q6 同等のアプリケーションが一般的なものかどうか？

- 1 追加開発無しで使える、要件に合ったベンダー・パッケージや、ASP、クラウドサービスがある
- 2 ベンダー・パッケージやASP、クラウドサービスはあるが、追加のカスタマイズが必要
- 3 ベンダー・パッケージやASP、クラウドサービスなどをカスタマイズしても業務に適用するのは難しい

クラウドへの移行やクラウドサービス活用のご支援

お客様のクラウド活用のご支援を個別セッションを随時開催

クラウド・クリニック

既存のお客様の情報システム基盤をクラウドへ移行する為の検討セッション

クラウド・業務クリニック

お客様のビジネス課題をクラウドサービスで解決する検討セッション



Transform — ITのチカラで、未来を変えよう。

JBCC
holdings

JBCCホールディングス株式会社
<https://www.jbccd.co.jp/> 証券コード9889(東証一部 情報・通信業)

JBグループ

JBCC
JBCC

iGUASU
イグアス

JBS
JBサービス

JBAT
JBアドバンス・テクノロジー

CIS
シーアイエス

SOLNET
ソルネット

GBS
ゼネラル・ビジネス・サービス

U-Learning
アイ・ラーニング

CCBS
C&Cビジネスサービス

JBPS
JBパートナーソリューション

JBCN
中国

JBTH
タイ

JBSG
シンガポール

クラウド
の
俺

J B C C株式会社
クラウドイノベーション事業部
Tel : 03-5714-5475
Mail : info@orenocloud.tokyo